第６４回宮崎県学校体育研究発表大会

高 等 学 校 部 会

１　研 究 主 題　生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するとともに、継続するための資質・能力を育む保健体育科学習
～生徒一人一人の思考力、判断力、表現力等を養う授業の創造と展開～

２　日程・会場

		9:40		10:10	10:35		11:30					15:00		16:00	
		9:00	10:00		10:25	11:20		12:15	13:10		15:10		15:45		
10月27日（金）	高等学校部会		受付	視点説明 開会行事 (20分)	教科研調査発表 (10分)	研究発表Ⅰ (15分)		授業発表Ⅰ（つながり） (45分)		授業発表Ⅱ（各部会） (45分)	昼休準備 食憩	ワークショップ授業研究 (110分)		研究発表Ⅱ (35分)	閉会行事	
			会場：県立福島高等学校（午後：串間市民文化会館）												

①　教科研究調査発表

内　　容	発　表　者
教科研究委員会の研究計画（令和５～７年）について	教科研究委員長 教諭　徳峰敬祐

②　研究発表Ⅰ

内　　容	発　表　者
全寮制中等教育学校における健康管理・体力向上について ～ウェアラブル端末を用いた保健体育～	県立五ヶ瀬中等教育学校 教諭　増田浩樹

③　授業発表

	学年	単　　元	発　表　者
Ⅰ (つながり)	第３学年	球　　技 （ネット型：バレーボール）	県立福島高等学校 教諭　松崎勇人
Ⅱ (地区)	第２学年	球　　技 （ネット型：バドミントン）	県立福島高等学校 教諭　星原貴浩

④　ワークショップ型授業研究

役職名	氏　　名		
指導助言者	日本女子体育大学	教授	高橋修一
司会者	県立小林高等学校	教諭	福元哲也
コーディネーター	県立日向工業高等学校	教諭	徳峰敬祐
	県立日南振徳高等学校	教諭	髙野茂嘉
記録者	県立日南振徳高等学校	教諭	成合重登
	県立日南高等学校	教諭	中須遼平

⑤　研究発表Ⅱ

	研究発表題目	発　表　者
1	【県北支部】 スキルチェックシートを活用した授業実践と今後の課題	県立延岡星雲高等学校 教諭　角田　太
2	【西都・児湯支部】 水泳（クロール）における指導の在り方	県立高鍋農業高等学校 講師　黒木千種

役職名	氏　　名		
指導助言者	宮崎県教育庁スポーツ振興課	指導主事	堀口直樹
司会者	日南学園高等学校	教諭	清水美行
記録者	日向学院高等学校	教諭	小川隆三
	都城東高等学校	教諭	石窪真一

県高等学校体育連盟 日南・串間支部の研究

1 研究主題

生涯にわたって心身の健康を保持増進し、豊かなスポーツライフを実現するための
資質・能力を育む保健体育科学習の在り方
～新学習指導要領に基づいた球技「ネット型」単元構造図の工夫～

2 研究の目的

体育や保健の見方・考え方を働かせ、課題を発見し、合理的、計画的な解決に向けた学習過程を通して、心と体を一体として捉え、生涯にわたって心身の健康を保持増進し豊かなスポーツライフを継続するための資質・能力を育成するために、単元計画構造図に積極的に ICT を活用する時間を示し、新たな技能を身につけることで、よりよく競技の特性に触れることで生涯にわたって豊かなスポーツライフを実現する資質や能力育成することに繋がるのではないかと考え、本主題を設定した。

3 研究の仮説

ICT 機器を活用する時期を単元計画の中に組み込むことで、身につけた技能や動きの出来映えを確かめたり、学習カードを電子化することで新たな技や動き及び得意技に挑戦する生徒の技能向上につながるのではないか。

4 研究の内容

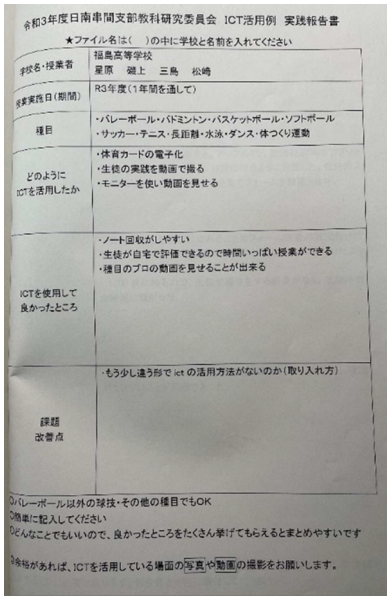
(1) ICT 活用
(2) 資質・能力のつながりのある単元構造図の検討

5 研究方法

(1) 地区研究委員会での検討
(2) 各学校での実践
(3) 日南串間支部研究授業発表
　授業者：宮崎県立福島高等学校 教諭 松﨑勇人
(4) 宮崎県学校体育研究発表大会
　第2学年 球技 ネット型 バドミントン
　・ Google クラスルームを活用し、学習カードの電子化を行い生徒の ICT 活用を促し集計をスムーズに行えるように実践した。

6 研究の実際

(1) 各学校における ICT 活用の調査
　各学校でどのように ICT 活用しているのか、また単元計画のどこで使うのが有効的なのかなどを各学校で調査してもらい、集約した。

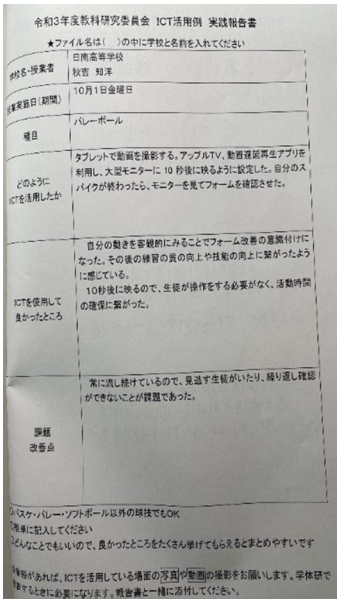


令和3年度日南串間支部教科研究委員会　ICT活用例　実践報告書

★ファイル名は（　）の中に学校と名前を入れてください

学校名・授業者	福島高等学校 星原　磯上　三島　松崎
授業実施日（期間）	R3年度（1年間を通して）
種目	・バレーボール・バドミントン・バスケットボール・ソフトボール ・サッカー・テニス・長距離・水泳・ダンス・体つくり運動
どのように ICTを活用したか	・体育カードの電子化 ・生徒の実践を動画で撮る ・モニターを使い動画を見せる
ICTを使用して良かったところ	・ノート回収がしやすい ・生徒が自宅で評価できるので時間いっぱい授業ができる ・種目のプロの動画を見せることが出来る
課題 改善点	・もう少し違う形でictの活用方法がないのか（取り入れ方）

①バレーボール以外の球技・その他の種目でもOK
②枠に記入してください
③どんなことでもいいので、良かったところをたくさん挙げてもらえるとまとめやすいです
④余裕があれば、ICTを活用している場面の写真や動画の撮影をお願いします。

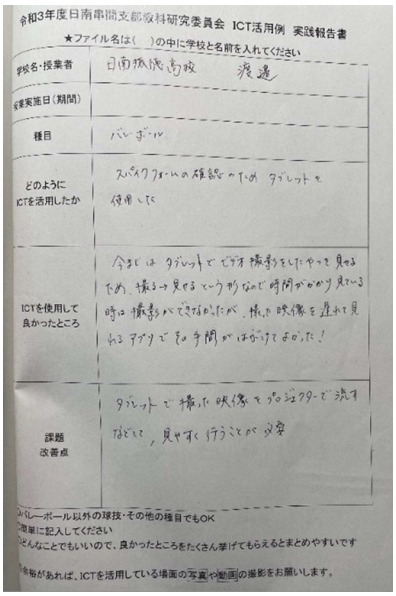


令和3年度教科研究委員会　ICT活用例　実践報告書

★ファイル名は（　）の中に学校と名前を入れてください

学校名・授業者	日南高等学校 秋吉　知洋
授業実施日（期間）	10月1日金曜日
種目	バレーボール
どのように ICTを活用したか	タブレットで動画を撮影する、アップルTV、動画視聴再生アプリを利用し、大型モニターに10秒後に映るように設定した。自分のスパイクが終わったら、モニターを見てフォームを確認させた。
ICTを使用して良かったところ	自分の動きを客観的にみることでフォーム改善の意識付けになった。その後の練習の質の向上や技能の向上に繋がったように感じている。 10秒後に映るので、生徒が操作をする必要がなく、活動時間の確保に繋がった。
課題 改善点	常に流し続けているので、見逃す生徒がいたり、繰り返し確認ができないことが課題であった。

①バスケ・バレー・ソフトボール以外の球技でもOK
②枠に記入してください
③どんなことでもいいので、良かったところをたくさん挙げてもらえるとまとめやすいです
④余裕があれば、ICTを活用している場面の写真や動画の撮影をお願いします。学体研で発表するときに必要になります。報告書と一緒に添付してください。



令和3年度日南串間支部教科研究委員会　ICT活用例　実践報告書

★ファイル名は（　）の中に学校と名前を入れてください

学校名・授業者	日南振徳高校　後藤
授業実施日（期間）	
種目	バレーボール
どのように ICTを活用したか	スパイクフォームの確認のため タブレットを使用した
ICTを使用して良かったところ	今までは タブレットで ビデオ撮影をしたやつを見るため、撮ってから見るという形なので時間がかかり 見ている時は撮影ができなかったが、撮った映像を選んで見れるアプリで 手間がはぶけてよかった！
課題 改善点	タブレットで撮った映像をプロジェクターで流すなどして、見やすく行うことが必要

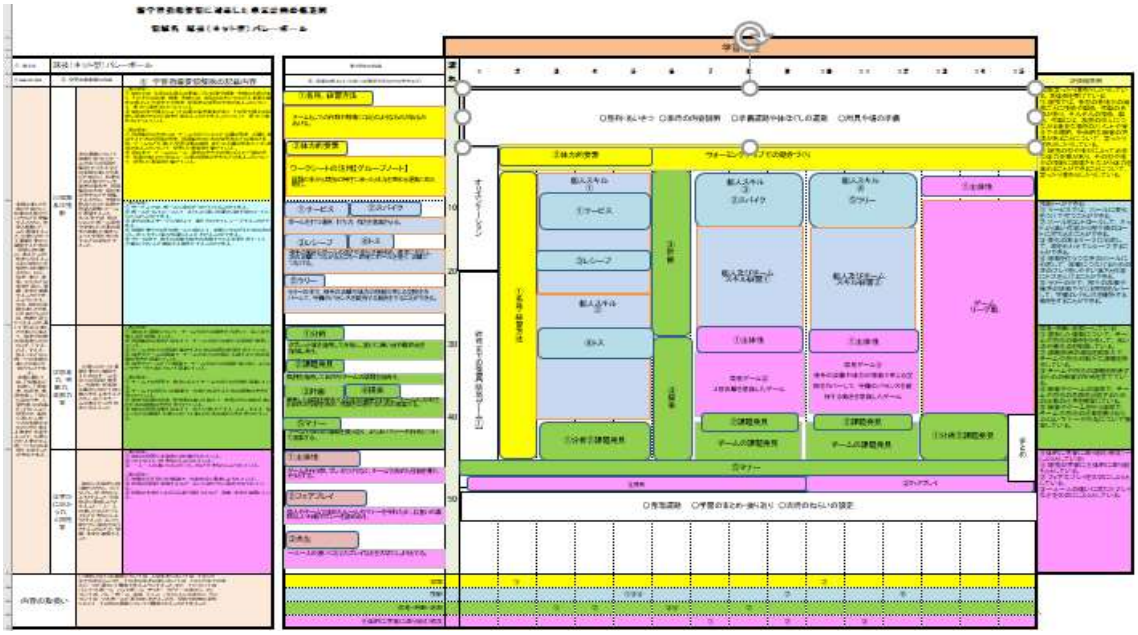
①バレーボール以外の球技・その他の種目でもOK
②枠に記入してください
③どんなことでもいいので、良かったところをたくさん挙げてもらえるとまとめやすいです
④余裕があれば、ICTを活用している場面の写真や動画の撮影をお願いします。

各学校で利用の仕方を工夫されており、より効果的な利用方法を検討する。

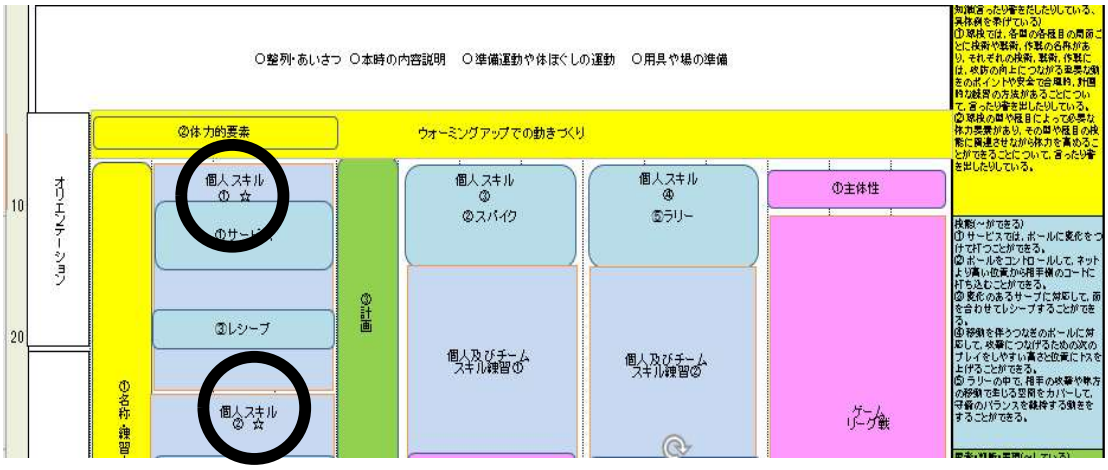
（2）資質・能力のつながりのある単元構造図の検討

ICT 機器の活用方法はどうであったか。

各学校に調査をおこない、ICT 機器の活用に着目し単元計画構造図に使用する時期を明記（☆）にすることで、技能の向上につながるのではないかと考え、作成をしました。



単元構造図（全体）



ICT 機器を使用する時期

利用する時期が明確になったことで、生徒へのフィードバックがスムーズになっているように感じた。また、指導する内容がわかりやすく評価するポイントが見てとれることができた。

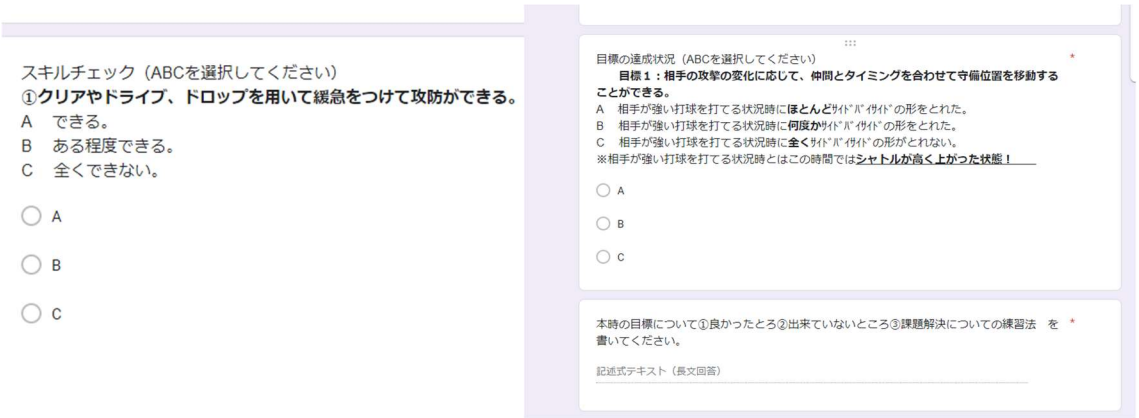
（3）指導と評価の工夫、ICT 活用法

今回、動作確認のための動画撮影と体育カードの電子化を行った。まず、動画撮影ではバレーボールの授業においてバレー部の生徒のサーブについての動作確認を行った。バレーボールをしたことがない生徒に対して、サーブフォームの良い例、悪い例を提示した。

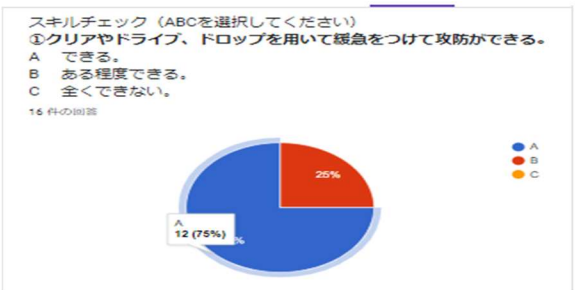
サーブトスを上げてから、最高打点でサーブを打てている物と、サーブトスを前に上げすぎておりラインオーバー、タイミングがずれている動画を Google クラスルームにあげ生徒に視聴してもらい、サーブへの理解に繋がると感じた。

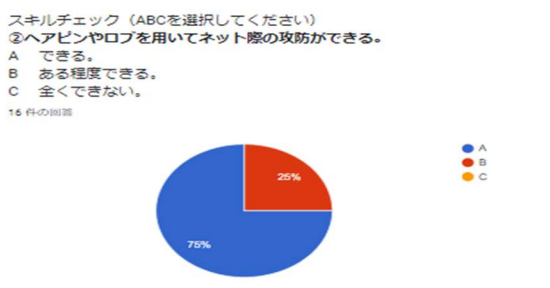
動画が同級生、友人であることから、普段消極的な生徒も楽しそうに動画を視聴しており、生徒達のやる気にも繋がっていると感じた。撮影に協力してくれた生徒自身も、他の生徒の参考になることで、自己肯定感が上がり、積極的に他の生徒に声を掛けている場面を多く見ることができた。

体育カードを電子化することで授業内の生徒活動量の確保や集計の効率を上げることに繋がった。まずは、Google クラスルームを活用し体育カードで提出していた内容を入力・提出させた。



入力された内容を、職員が集計・評価していく段階で、紙ベースで提出させていたときより早く処理が行えることを感じた。生徒においても紙ベース時より提出状況が良くなっている。





体育カードの最後の項目に本時間の感想や、本時の目標について実践出来たかなどを入力させることで評価に繋がりやすいのではないかと感じた。

7 研究成果と課題

（1） 成果

○ 生徒自身を撮影することで、体の動かし方を視覚的に捉えることができ、生徒も積極的に動画を撮影、視聴し技能に関する意識をあげることが出来た。

○ 単元構造図を作成することで、指導する内容と評価するポイントが明確になり、生徒への授業に対する取り組む姿勢に変化が見られた。

○ 学習カードを電子化し集計結果が一目で見ることができ、よりスムーズな評価に繋がった。また、家庭、SHR の時間で提出をさせることで運動量の確保にも繋がった。

（2） 課題

● ICT 機器の利用方法が理解できず、活用するのにためらいがある。

● 動画を撮影することに集中し、周りとの意見交換などの活動が少ない感じた。

● 単元構造図を作成するにあたり、指導する内容と評価を学年またぎで考えることが難しいと感じた。

● 学習カードを電子化したことにより家庭環境によっては、端末を持っていない生徒に対して、学校での入力、職員が入力という形で対応した。個人の端末を持っていない生徒もいる中で、課題があると感じた。

研究の変容と研究の成果

授業発表Ⅰ（つながりのある研究）【ネット型球技：バレーボール】

宮崎県立福島高等学校　教諭　松﨑　勇人

ア　事前研からの変化

（１）　事前研の反省点

事前研では、２つの反省点が上げられた。今後の思考ツールの展開としてフィッシュボーンを個人技能の可視化として活用した後の授業展開、ICT 活用方法が見られず、今後どのように活用するか。

（２）　事前研からの改善

ア　思考ツール活用について

(ア)フィッシュボーンと個人技能について

本研究では、技能のポイント、技術の練習法などを生徒自身に考えさせる授業を行った。フィッシュボーン(思考ツール)を使ったことのない生徒が多かった為、1 時間目のオリエンテーションにおいて、フィッシュボーンの使い方の説明を行った。

次に、２～６時間目にかけて個人技能のポイントを確認させるためにフィッシュボーンを使用し、自分が苦手とするバレーボールの技能を分析させ、技能向上を図った。

(イ)イメージマップ＋コンセプトマップとチーム技能について

フィッシュボーンで個人技能をまとめた後に、７～１２時間目で、イメージマップ＋コンセプトマップを使用し、チームで３段攻撃の分析を行った。個人技能からチーム技能に移行する手段として、授業をスムーズに展開することができた。

イ　ICT の活用方法

Google クラスルームを活用した体育カードを提出させ、反省をチームごとに振り分け iPad に送信することで前回の反省を踏まえて、思考ツールの作成に取り組むことが出来ていた。また keynote を使用し、各技能の練習方法を動画でまとめ配布した。

keynote に保存した動画を見て、生徒が練習を選択（保健体育科職員が作成）

イ　視点に対する最終的な成果

(1) 効果的、効率的な思考ツールの活用が出来ていたか

・思考ツールの活用は、高校体育における思考力、判断力、表現力等の育成に効果的である。思考ツールを活用することで、生徒はより効果的に思考し、主体的に学び、課題解決に取り組むことができるようになった。

・自己の課題の分析や整理がしやすくなり、自己の考えの可視化することができ、知識、技能の定着などの効果があった。

・思考ツールを使うことで、生徒が積極的に自己の能力を高めようと学習に臨んでいた。

・単元前半ではチーム技能を分析するために、思考ツールを使った授業に取り組んだ。

・単元後半のゲーム中心の授業では、生徒から「思考ツール使わないんですか」など、仲間との対話的な授業を求める積極的な声が上がった。

(2) 効果的、効率的な ICT の活用が出来ていたか

・Google クラスルームを活用した体育カードを提出させ、反省をチームごとに振り分け iPad に送信することで前回の反省を踏まえて、思考ツールの作成に取り組むことが出来ていた。

・体育カードを google クラスルームで提出させることで、思考ツールを活用しながらも運動時間・運動量の確保にもつながった。

・keynote を活用することで生徒個人、チームの課題に沿った練習方法を選択し、技能を高めることが出来た。

・一人一台の端末ではなかったので、個人の振り返り(動画撮影)などが出来なかった。

授業発表Ⅱ（日南・串間支部の研究）【ネット型球技：バドミントン】

宮崎県立福島高等学校　教諭　星原　貴浩

ア　事前研修からの変化

事前研修後からの研究授業への取り組みとして３つのことを工夫した。

（１）　評価の視点（ABC）を明示

本授業では目標が技能であり、どの程度の状態が ABC に当たる評価なのかを具体的に示し、評価内容について学習の中でスクリーンに映しながら、可視化することでイメージを生徒にもたせることを意識した。

（２）　動画の活用

ICT 活用としてフォーメーション（ｻｲﾄﾞﾊﾞｲｻｲﾄﾞ、ﾄｯﾌﾟ&ﾊﾞｯｸ）について動画を見せながら解説した。また、同じ動画を Google　Classroom に事前配信し、反転学習として活用した。事前に観ることや動画を使用して細かく説明することで、攻撃時、守備時のフォーメーションについて生徒の理解を深めることができた。

（３）　ウオーミングアップの内容変更

ウオーミングアップ時に紙ボールやテニスボールを使用したフットワークを事前研では１対１で行ったが、ダブルスの動きに繋がるように、ペア同士のフットワークをとりいれた。空いている空間に投げることや緩急の使い方について理解を深めることができた。

イ　視点に対する最終的な成果

今回の研究では下記（１）～（３）の３点を支部研究の柱として進めたところである。

（１）　単元構造図の活用について

単元構造図の活用では、「指導（「技能」と「学びに向かう力、人間性等」）」と「評価（「技能」と「主体的に学習に取り組む態度」）」を意図的にずらすことを工夫として取り組んだ。

指導したことが授業間隔を空けて評価することで「深まった状態」「高まった状態」で評価することを目的としたものである。実際に３時間目に指導したことを９時間目、６時間目に指導したことを 12 時間目に評価した。どちらの評価に対しても「高まり、深まり」が見られ、合意形成の場ではフライトやフォーメーションについて具体的な例を挙げながら話し合いや学び合いを行う場面が多く見られるようになってきた。知識や技能の高まりで、思考力・判断力・表現力等の奥深さに触れることができ、学ぶ意欲の向上に果たす役割は大きいと考える。

（２）「C の生徒」への手立てについて

C の生徒への手立てとして、①教材・教具の工夫、②ペア（ダブルス）の工夫が大切と感じた。シャトルやラケットを思い通りに操作できない生徒に対してフォーメーションを理解させるには用具の工夫を行いながら、シャトルの空間時間を意図的に長くしてや

ることで理解の深まりや技能の高まりを味合わせることができた。また、ダブルスにおけるペアでは評価 A の生徒が C に対してアドバイスや補助的役役割を行うことで、学びに対する意欲の向上が見られ、リトルティーチャーが C 生徒への手立てとしての効果的な役割を果たしてくれると考える。

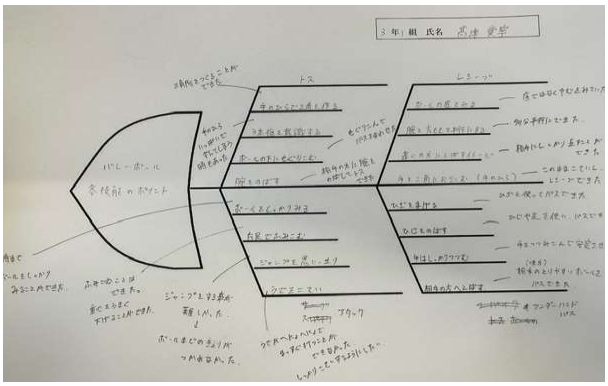
（3）技術向上のための ICT 活用について

本授業では ICT の活用として、Google Classroom をベースに学習を進めた。内容としては①学習カードの記入と提出、②思考ツール表（課題）の記入と提出、③動画の配信（反転学習）を中心に進めた。①学習カード、②課題の提出については、これまでの紙ベースでの点検作業がなくなり、パソコン上で点検や評価を行うことが出来るため、仕事の作業効率が格段に上がり、スムーズな仕事が出来るようになった。また、動画の配信では事前に行う内容を生徒が予めに予習することが可能になり、授業の内容の理解が早くなってきたように感じる。今回は既存の ICT を活用しながら学習を進めてきたが、今後はロイロノートや Jamboard も活用できるように ICT 活用能力を高めていきたい。

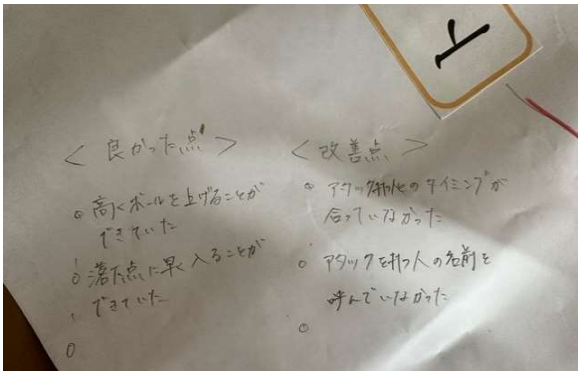
授業の様子

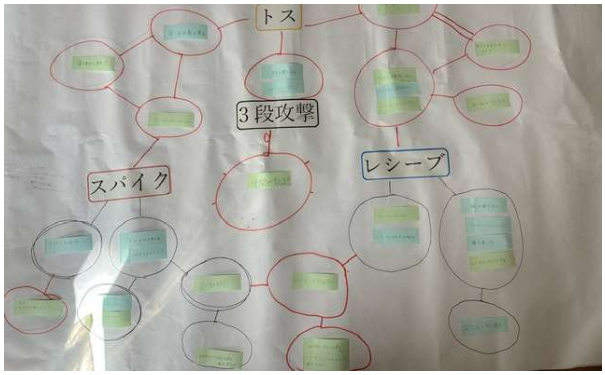
（１）「つながりのある学習」　第３学年　球技（ネット型：バレーボール）

思考ツールに書き込む生徒



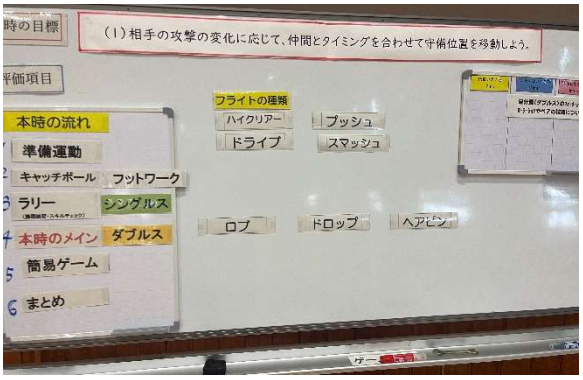
フィッシュボーン（個人技能の分析）





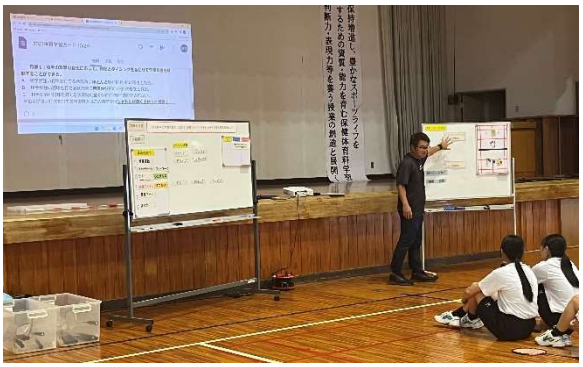
実際の思考ツール（チーム技能の分析）

（２）「日南・串間支部研究」　第２学年　球技（ネット型：バドミントン）



目標や板書

Ｃ生徒への手立て（ｼｬﾄﾙ固定）



ICT 活用

研究授業後のﾘﾄﾙﾃｨｰﾁｬｰ

高等学校部会　ワークショップ型授業研究会について

R5.10.27

1　日程　１３：１０～１５：００（１１０分）

時　間	内　容	担　当
13:10～　（ 2 分）	指導助言者紹介	進　行
13:12～　（ 3 分）	授業者振り返り（３分×１名） ［つながり］　県立福島高等学校　松﨑　勇人　教諭	授業者
13:15～　（ 5 分）	ワークショップ型授業研究会Ⅰ＜説明＞	コーディネーター 徳峰先生
13:20～　(35 分)	授業研究会Ⅰ（つながり） グループ内で深める(20 分) ⇒ 全体で広める(15 分)	
13:55～　(10 分)	（　休　憩　）	
14:05～　（ 3 分）	授業者振り返り（３分×１名） ［支部研究］　県立福島高等学校　星原　貴浩　教諭	授業者
14:08～　（ 2 分）	ワークショップ型授業研究会Ⅱ＜説明＞	コーディネーター 髙野先生
14:10～　(35 分)	授業研究会Ⅱ（地区研究） グループ内で深める(20 分) ⇒ 全体で広める(15 分)	
14:45～　(15 分) ～15:00	指導講評 日本女子体育大学　高橋　修一　教授	指導助言者

2　授業参観の視点

つながり (バレーボール)	1　系統性を踏まえた指導内容の一層の充実、指導と評価の一体化 ○　学習内容系統表及び学習内容相関図の作成は適切で効果的な活用がなされていたか。 2　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ○　授業の目標を達成するために、効率的で効果的な思考ツールを活用できていたか。 3　共生の視点に立った指導内容の充実 ○　学習の場やルール、教具の工夫がなされていたか
地区研究 (バドミントン)	1　指導と評価の一体化 ○　単元計画構造図に示した指導と評価の時期が適切で効果的な活用がなされていたか。 2　「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善 ○　技能の向上を達成するために、効果的に ICT 機器を活用する時期の設定がなされていたか。

3　ワークショップの進め方

(1)　各グループを 6 名程度で編成する。

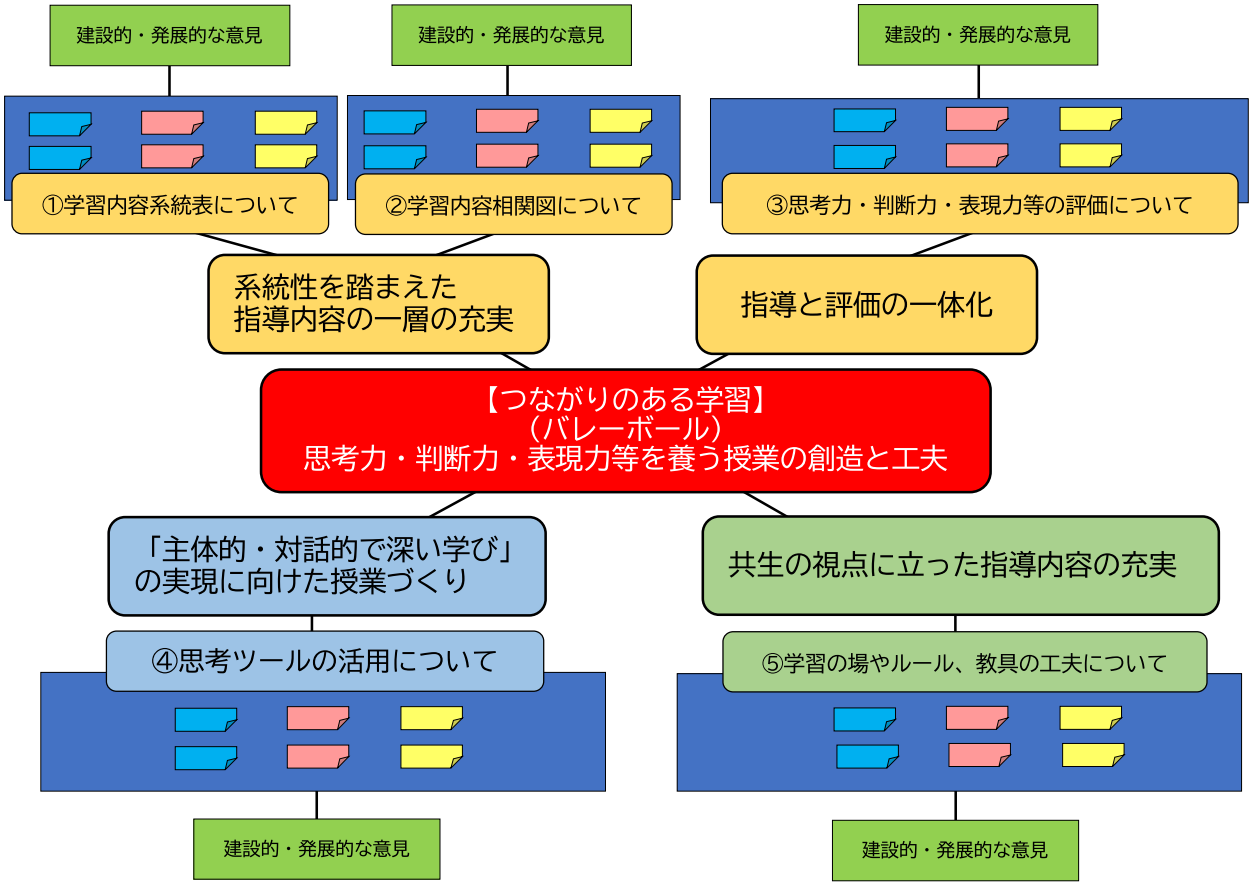
(2)　参加者は公開授業を振り返り、「コンセプトマップ」の項目に沿って意見を記入する。

(3)　「授業参観の視点」についての意見を付箋に書き、思考ツールを活用してまとめる。

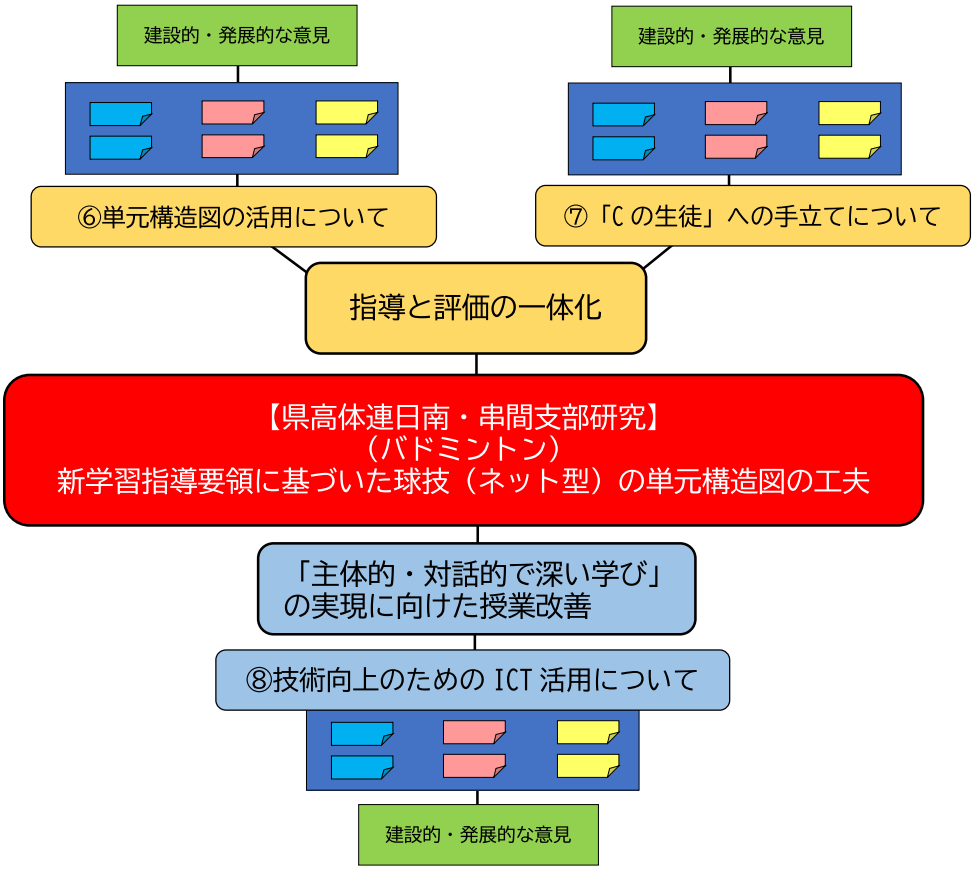
（※記入の際には、主観を避け、事実を客観的に表現すること）
■青色の付箋･･･『良かった点』(生徒・教師)
■赤色の付箋･･･『改　善　点』(生徒・教師)
■黄色の付箋･･･『質問したい点』『疑問点』
■緑色の付箋･･･『建設的・発展的な意見』
※教科研究委員は担当グループを回りながら思考ツールの活用をサポートする。

(4)　発表時間は 3 分程度とし、発表は各班 1 名ずつローテーションで行う。その際、発表者以外の班員は別の班の発表を聞きに行く。

コンセプトマップⅠ（つながりのある学習）



コンセプトマップⅡ（地区研究）



授業研究会の記録

Ⅰ.授業者振り返り（つながり　松崎　勇人　教諭）

・緊張と不安で始まった授業でしたが、スムーズに実施できた。

・思考ツールに関しては、フィッシュボーンで個人のスキルを確認させ、コンセントマップにおいてチームのスキルアップを図ることができた。

○質問事項

・思考ツール（コンセントマップ）を使用し、目標を三段攻撃とした理由は何か。

⇒生徒たちが決める方法もあるが、生徒の実態を踏まえコンセプトを決め、それに沿って授業を進めてきた。

・正規ルールにするのはいつ頃から導入するのか。

⇒生徒の実態に応じて16時間目に実施予定で進めている。習得状況においては、まだ先になることも考えている。

○グループ協議〔○良い点　●改善点　△質問　□建設・発展的な意見〕

グループ	主な意見
A	○女子のワンバウンドルールは、共生の視点での工夫が見られた。 ○思考ツールは作戦や整理するためには必要。 ●話し合いや意見交換の機会が少なかった。 △他の思考ツールの活用と ICT での活用はないのか。 □共生の視点で強いスパイクには条件をつける。
B	○思考ツールで技能のポイントを整理し、知識が深まっている感じがした。 ●思考ツールを理解させるまでが難しい。 △学習内容系統表や相関図は ICT を活用できなかったのか。 □課題発見後に練習時間を作り、教え合って深めさせたい。
C	○思考ツールを活用することで教師側も説明しやすく、生徒も課題を立てやすい。 ●グループ内での教え合いや話し合いが少ない。 △ICT を活用しての練習方法の良し悪しをどう見ているのか。 □作った思考ツールを再度取り出すことでもっと深まっていくのではないか。
D	○自らの練習法を ICT から選択でき動画で繰り返し見ることができる。 ●思考ツールで書いた技能のポイントが練習中の生徒の声かけに出てきてほしい。 △学習内容相関図をどのような場面で活用したいと思うか。 □前時で行った思考ツールを確認すれば、さらに効果的ではないか。 □練習法動画に説明があればもっとわかりやすい。
E	○思考の可視化によって共有ができるので学習内容がより深まる。 ●思考を言語化し、他のグループと共有を図りながら新たな発見につなげたい。 △思考ツールで生徒たちの思考が整理できていると思うか。 □共生の視点で男女の能力を確認しチーム編成をする。
F	○思考ツールは考えを可視化でき、活用しやすい。 ●新たな課題を発見しやすいようにどう促すか。 △評価の仕方は何をもとに行うか。 □思考ツールを個人やグループで使い分けてもよい。

２.授業者振り返り（支部研究　星原　貴浩　教諭）

・単元構造図の活用については、指導と評価のズレが生じていることが多々あったため、バドミントンの授業が終了するときに確認をして今後に活かしたい。

・C の生徒への手立てについては、道具の工夫を行い、生徒が理解しやすいようにした。

・ICT 活用については、体育授業における予習ということで、動画を GoogleClassroom に貼り付け、活用した。

○質問事項

・練習のグループ分けについて、何か配慮はしたのか。

⇒経験している生徒と理解できている生徒、苦手な生徒を中心に構成し、授業を展開した。

・評価をどのように行うのか。

⇒本時の授業評価については、次回の授業以降に観察による評価、学習カードによる評価など評価できる準備をしている。

○グループ協議〔○良い点　●改善点　△質問　□建設・発展的な意見〕

ｸﾞﾙｰﾌﾟ	主な意見
A	○「C の生徒」への手立てができていた。 ●ハイクリアなどラケットを使った練習がない。 △「C の生徒」への配慮が大きすぎるのではないか。 □ボールを使って攻守の動きを確認することで、新たな戦術を考えるきっかけをつくる。
B	○動画での説明がわかりやすかった。 ●評価時期はもう少し空けてからでもよいのではないか。 △「C の生徒」のサーブが上手くいかず、ゲームにならないのはどうするのか。 □番号などの合図で2人が動けるサインを作る。
C	○道具の工夫がなされていて動きがわかりやすかった。 ●「C の生徒」が打つ場所がわかりやすい言葉かけがあればよいのではないか。 △評価をどのように行うのか。 □ICT を使って打ち方や動きかたを撮影し、手本動画と比べてみる。
D	○場や道具の工夫がよかった。 ●技術が追いついていない生徒には難しい練習であった。 △評価をどのように行うのか。 □経験者などを対面において動きを確認する。
E	○明確な指示で何を考えて練習するかわかりやすい。 ●生徒に気づきを与える仕掛けがほしい。 △経験者の活用はしないのか。 □動く位置などの印を見やすくする。
F	○練習方法の工夫（映像）で理解して取り組んでいた。 ●動きのイメージが持てるような練習方法がほしい。 △ゲーム相手を変えないで行うのはどうしてか。 □トップアンドバック＝（奥）サイドバイサイド＝（上がった）などわかりやすい声かけに変える。

３．指導助言者講評

日本女子体育大学 高橋 修一 教授

■授業を通して

・２つの授業に共通していたのが、事前の準備が丁寧にされていたことである。

・準備運動は全員一緒にしたが、中学校では、それぞれで考えて準備運動をする力を育てているので、高校でもできるのではないか。

・授業最後のまとめがちょっと弱かった。目標や課題に対して、本時の確認内容が合致しているとよい。

・本時の授業で「何を学んだ?」という問いに 同じ答えが９割ならいいが、半数以下なら分かっていない。

■学習内容系統表・学習内容相関図について

・学習内容系統表の各段階における縦の内容しか見ないのではなく、横の内容のつながりも理解しながら、高校生段階でのつまずきや課題を把握するようにしていただきたい。

■「思考力・判断力・表現力等」について

・思考ツールを使うときの注意点として、あれを使えば力がつくのではない。使わせてフィードバックして強化することにより、生徒自身の資質・能力を向上させることにつながってくる。

・授業内容は意図的・計画的なものでなくてはならない。「この単元でどんな資質を育むのか」を教員間で共有認識を持っておく必要がある。

・数値を取って分析や変化を見ていくのも手段として良いのではないか。こういう練習したら、どのように変化するのか、数値の変化を表現させることもできる。

■「学びに向かう力、人間性等」について

・練習の時にアドバイスし合うような働きかけを。ナイス! ドンマイ!などの声掛けも必要である。

・態度の指導について、態度の内容も学習指導要領に書いてあるため、指導して評価しなければならない。

■「知識及び技能」について

・技能の評価が後になるということだが、教えてすぐできること、練習してできるようになること、技能と態度、思考など関連している面がたくさんある。

■ICT の活用について

・ICTと運動量の関係をよく言われるが、動画を見て練習方法を選択させることで、運動量を増やすことも可能になる。

・一人一台端末の時代、これから入ってくる生徒が、高校では使わないんだと思わせてはいけない。

・運動が苦手な生徒でも、知識を伝えることはできる。効果的な使い方の工夫が必要である。

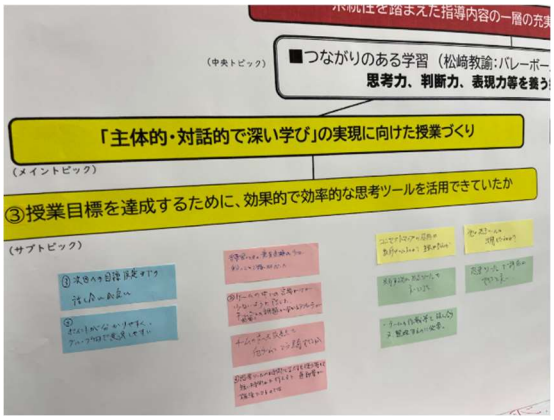
・運動が苦手でも参加できる体育授業を目指してほしい。

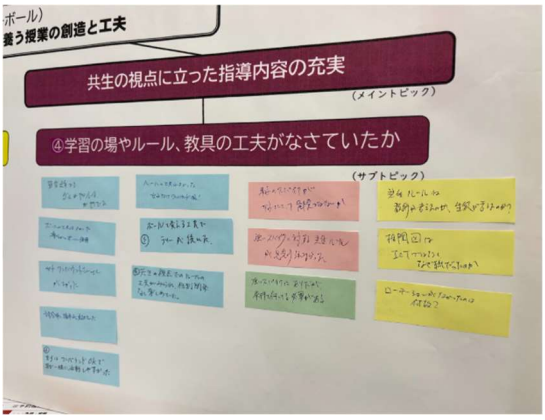
授業研究会の様子

会場の様子

思考ツールを活用した授業研究会の様子

■つながりがある学習

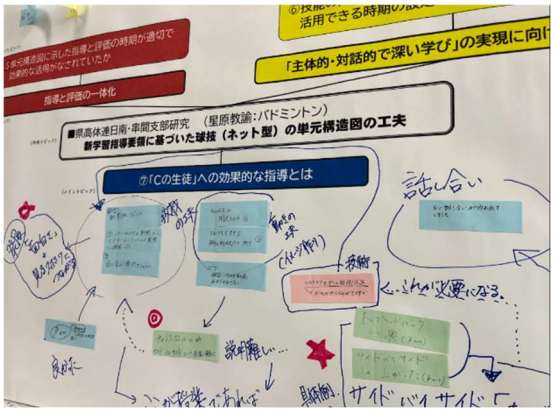




・前半の「つながりのある学習」の授業研究会については、参加者の多くが思考ツールを活用した経験が少なかったため、付箋をラベリングする作業が中心となる活動であった。

・参加者の意見等を集約する活動がメインとなっていた。

■地区研究



・後半の「地区研究」の授業研究会では、前半の経験を活かし、参加者の意見を集約しながら、解決するためのアイデアをグループ内で協議することができた。

・異なる年齢層、種目の参加者が様々な視点でアイデアを出すことにより、各学校でよりよい授業を展開するための工夫を共有する活動ができた。